

# 埼玉大学国語教育学会 第9回大会 シンポジウム

## テーマ「メディア・リテラシーと国語教育」

- ・日時 平成17年11月12日(土) 午後1時～午後3時
- ・場所 埼玉大学教育学部C棟 C1講義室
- ・シンポジスト 池田 邦彦(埼玉県入間市立東町小学校 教諭)
- 中村 純子(神奈川県川崎市立宮前平中学校 教諭)
- 岩永 正史(山梨大学教育人間科学部 教授)
- ・司会 竹長 吉正(埼玉大学教育学部 教授)

### 〈司会〉

それではシンポジウムを始めます。まず、ちよつとこのシンポジウムのテーマについて申し上げたいと思います。「情報化社会」といわれる現代は、同時に情報氾濫社会でもあります。情報を伝えるメディアが多様になった現在、メディアそのものの正体をよく理解し活用する能力や、インターネットなどを通じて自ら情報を発信する能力が求められています。そのような中で、言葉の能力育成に関わる国語教育はどのような進路をとるべきか、共に考えていきたいと思ひます。

そのような趣旨で、今回、このシンポジウムを計画いたしました。「メディア・リテラシー」という言葉につきましては、いろいろな定義がありますがすけれども、簡単にその定義を申し上げ

げますと、「メディアが発信する様々な情報を読み解く能力であると同時に、メディアを使って情報を発信する能力」というふうに言うことができるかと思ひます。そこで、今回はお三方の先生をお招きしましてシンポジウムを計画したわけです。私の方から本日のシンポジストの方を紹介させていただきます。

まず、向かつて 右の方からです。池田邦彦先生。埼玉県の入間市立東町小学校の先生です。続きまして、神奈川県川崎市立宮前平中学校の中村純子先生です。山梨大学教育人間科学部教授の岩永正史先生です。

ただ今ご紹介いたしました三人の先生方にお話をして頂き、また、フロアの方々にご発言を頂いて、このシンポジウムを実りのあるものになしたいと思ひています。みなさんもうぞ奮つ

てご発言くださいますよう、お願いいたします。

それでは、第一回目の発言といたしまして、シンポジストの先生方からお一人十五分ずつお話をして頂きます。最初に池田先生からよろしくお願いいたします。

### 〈池田邦彦 第一発言〉

入間市立東町小学校の池田邦彦です。今年は埼玉県の国語科の長期研修教員として埼玉大学の竹長先生のところで国語を勉強させて頂いています。

今年は国語を勉強しておりますが、もちろん小学校の教員ですから、学校に戻れば他の教科も担当しています。特に小学校の教員ですと、教科の指導ももちろんですが、生活の指導ですとか、子どもと遊んだりとか、子どもとかなり密着した生活をしております。今年はそんな現場を離れて勉強しています。

私がお話したいのは全部で三つ。本日にメディア・リテラシーの「基本の基本」、基礎の部分をお話いたします。三つのうち、一つは私が感じている今の子どもたちとメディアに関わる問題意識、それともう一つは、小学校教育におけるメディア・リテラシーのあり方、そしてメディア・リテラシーを育てる具体的な授業案についてです。

まず一つ目についてです。先ほど全教科を担当しているとお話ししましたが、全教科を担当していると大変ですが、子どもたちの学力について、いろいろな面から考えることができるという良さもあります。私は、学力づくりにおいて、国語科はとても大事だと思っています。なぜなら、国語ができないと、全

教科の勉強ができないのではないかと思うからです。つまり、国語科で身につける国語の力が、他の教科の学習場面ではたっているなあとと思うことがとても多いということです。また、その国語の力とは、国語科でやっている、文字を読む、作文を書く、というそのくらいではないかと思われるのですが、それだけでは十分ではないということも強く感じています。そのことについて、いくつか事例を挙げて見ていきます。

まず、「気付いたことを書くのが苦手」ということです。いきなり国語ではなくて社会の授業の話です。資料の左側の写真は、五年生「雪国のくらし」の授業で使ったものです。新潟県に行ったときに私が撮ってきました。右側は子どもと一緒に見学に行つて撮ってきた消防車の写真です。四年生の授業で使いました。これを見せて、「気がついたことは何？」などと授業で問いかけることがよくあります。みなさんは何か気がついたことはありますでしょうか。社会の授業というのは、身近なものについて問題意識をもつて「なぜこうなるんだろう？」「どうしてこうなっているんだろう？」と考えることから始まります。

左の写真では、「なぜ屋根がこんなに急なんだろう」「隣の家との境目に塀がないのはどうしてだろう？」また「隣の家と同じ向きで建っているのはなぜだろう？」など、こういうことに気がついて欲しいのですが、なかなか子どもたちは気がついてくれない。消防車も、見学に行けば実物に触れるんですが「あ、消防車だ」で終わってしまう子どもが多い。そこに問題意識を感じました。どんな問題かは後でお話します。

一斉下校の時、四年生の女の子がある政治家について、「あ

いつバカだよね」などと大きな声で言っているのを聞きました。「なんで？」と尋ねると、「お母さんが言ってた」「テレビで言ってた」と答えました。自分はその人について何にも知らないのに、ただそれだけの情報なのに、わかったつもりになっているんですね。テレビでやっていること、最近は夕方のニュースもワイドショー化してきて、それを見ている子どもがこうなっているということが増えている気がします。

続いて「〇〇っていいよね」という会話についてですが、最近の子どもたちの会話はこういうものが増えているんじゃないかと思うのですが、みなさんどうですか。ただ価値観を共有しているだけで、自分の考えを言うのはよくない、そういう会話が増えているように思います。また、その下にあるアンケートの結果は、「信じられる」メディアについて試してみたのですが、「テレビ」「新聞」「インターネット」に比べ、「友達」を「信じられる」と答えた子どもが少ないわけです。さらに、「死んだ人が生き返るか」という調査では、小四の百人に十四人は、「死んだ人が生き返る」と答えているわけです。理由としてあげられている「映画」や「テレビ」の影響が本当たしたら、この影響力の大きさは重大な問題だと考えた方がいいでしょう。そして、その下にあるように、遊び感覚、手っ取り早さ重視でメディアに向かう子どもが増えているという実態を考えると、これは何とかしなければならぬという問題意識を強くもったわけです。

そこで、こちらにいらっしゃる中村先生や岩永先生が研究されているメディア・リテラシーと出会い、我が意を得たり、こ

の力こそ大事だ、と思って勉強を始めたわけです。国語科で大事なのは、文字の読み書きに加えて、メディア・リテラシーを育てることではないかと思ったのです。

では、そのメディア・リテラシーとはどんな力なのか、大ざっぱに言うところ「知識をメディアを通して伝える力」になります。これは伝える側の力ですが、受ける方の力もあります。受信者はメディアを通して情報を得るのですが、そのときどこまで意識できるのか、知識なのか、知識を加工したメディアについてなのか、さらにはその知識の発信者まで意識できるのか、これがメディア・リテラシーに関わるのです。

メディアを通じた情報伝達とは、「学習」と言いかえることができます。正しく学習するためには、「知識は誰がつくったものである」さらに、「知識は相手や目的に応じて変化している」ということをよく理解している必要があります。そのためには、情報をやりとりする上で、発信する際の相手意識と同様に受信する際にも相手意識というのが必要になります。

小学校国語科の学習指導要領の目標から、メディア・リテラシーは国語科で育てる必要があるのではないかと思います。メディア・リテラシーとは、言語を運用する能力ではないかという仮説を立て、次の三つの言語運用能力としてのメディア・リテラシーを考えてみました。

一つは「想像力」と「思考力」です。先ほど雪国と消防車のところでお話したように、雪国の屋根の傾きに気がついて雪国の生活を想像したり、なぜこうなっているのだろうと発想して自分で様々な考えを巡らす力ということになります。それを

育てていく必要があると思うのです。

もう一つは、学び合いの力。先ほどの「〇〇っていいよね」のところでお話ししましたが、自分の思いをただひけらかすだけでなく、自分の考えを話して、相手の考えを聞いて議論できる力、おたがいに考えたり相談したりする力が必要ではないか。

そして最後はメディア経験・メディア感覚。テレビですとか新聞、その他のものを言語とつないでいくということです。小学生は多様な経験をすることが大事です。授業の中でたくさんメディアに触れる、ということがメディア・リテラシーを育てる上で大切になります。

国語科でその三つを育てることが大切であるという立場に立って、実践を考えてみました。じゃあ小学校ではどうしたらいいか。小学校教育におけるメディア・リテラシーのあり方について、入門期の国語の授業からお話しします。

「入門期の国語の授業はメディア・リテラシーの学習である」と書きましたが、ここには2つの意味があります。一年生からメディア・リテラシーをしっかりと育てていきましようという意味と、一年生の授業の中にメディア・リテラシーを育てる国語の授業のヒントがたくさんあるのではないかという意味で、こんな題を付けました。

まず、「一年生から」ということですが、調査をしたところ、一年生と二年生との間には「見る、たまに見るメディア」に大きな開きがあるということです。つまり、一年生と二年生の間では、一人の子どもが触れているメディアの種類も、また、たくさんのメディアに触れている子どもの数も大きな差があると

いうことです。ということは、一年生では知らなかったメディアのこと、例えばインターネットのホームページのことなども、二年生では知っているということになります。

また、隣のグラフに示したように、三年生になると、自分用のテレビを欲しいという子の七十六%よりも多くの子どもが携帯電話が欲しいと言っているという実態があります。これらから私は、一年生のうちから、先ほどあげたようなメディア・リテラシーを育てる学習指導を行った方がよいのではないかと考えます。

一年生より小さい「幼年期」のことを考えてみますと、音声言語の獲得はお母さんとのコミュニケーションの中で行われますが、文字言語の獲得はもうすでにテレビなどのメディアとの接触なしでは始まらないと言えます。さらに、本来コミュニケーションの中で言語の運用能力は育っていくのですが、最近の子どもはテレビとコミュニケーションして言葉をおぼえている。つまり、子どもは一年生の段階から真っ白けではなく、メディアの影響で言語の力がかなり育っていると考えます。一年生の学習指導はそんな子どもたちと一緒に始まるのです。メディアを扱う必要があります。

入門期の学習指導については、資料に載せてあります。

まず、「想像力・思考力」についてですが、上と下は何の教科書だと思えますか。上は算数の教科書です。下は音楽の教科書です。どちらも一年生の一ページ目、二ページ目に当たるものです。

算数の教科書について、この前一年生を初めて担任した先生

と話したんですが、教科書を見て「池田さん、これからどうやって授業やるの。だって字がないんだもん。数字もないよ」。下の音楽、「音楽が一番困ったのよ。だって絵しかないんだよ。これで三時間授業するって書いてあるんだよ。どうするの?」。みなさんが一年生を担任したら、どんな授業をしますか。きつと同じように困ると思うんです。私もそうでした。

初めて一年生を担任すると、まずそれにびっくりします。だけど、文字なんてなくてもいいんです。一年生の学習は、この絵から自分で言葉を紡いでいく、見つけていく、子どもは文字なんてなくても、全然気にしないんです。文字がなくても、むしろない方が自由に、どんどん言葉が出てきます。先生もそういう方針でやっていく必要があるのではないかなと思います。

下の音楽で言うならば、「絵から歌を見つけて歌う」そのためには想像力が必要です。大人は明らかにぞうさんの絵があるから「ぞうさん」を歌うかなあ、と思っても、子どもはなかなか見つからなかったりします。また、逆に大人が想像しなかったような歌を見つかったりします。この絵からみなさんは何曲ぐらい歌を見つけれましたか。その先生の話では、子どもたちはこの絵から、「小さい秋見つけた」や「大きな栗の木の下で」という歌を見つけたそうです。大人の感覚では見つけられませんが。

次に「いろいろなくちばし」という説明文です。普通の授業の展開では、問いに対する答えをさがそう、問いの文と答えの文を対応させることを学ぶ説明文の学習ということになります。しかし、ここでメディア・リテラシー的に教材を見て、私

がここでお話ししているように、想像力をはたらかせて思考させることができます。

まず、今まで見えていなかった鳥のくちばしをクローズアップして、これは何だろうということを想像させて、引いて見てみると、あ、何だかわかったとなる。このように、細かい部分から大きな部分に視点の変更をするということを意識させる授業が作れます。具体的に言えば、子どもたちにクイズを作らせる授業などです。教材文の鳥や身近のものの一部や細かいところを見せて、「これなんだ?」、で、引いてみると答えがわかる、というの授業ができます。

もう一つあげたのは一年生の第一教材です。これも文字がないと三時間も四時間も教えるのなんか無理だとなります。でも、子どもたちは登場人物のひとつひとつに目がいきます。子どもたちの目がいったところについてをお互いに出し合ったり、話し合って深めていく。また、だれちゃんはネコに気がついた、だれちゃんは何に気がついたなど、それぞれが気がついたことや思ったこと、考えたことを交流しながら言葉を紡いでいくというような活動ができるのではないかと思います。

その後、「学び合う力」などがありますが、時間がきてしまいましたので第一発言では資料三までとしたいと思います。うまく話せませんでした、ご静聴ありがとうございました。

#### 〈中村純子 第一発言〉

みなさんこんにちは。川崎市立宮前平中学校の中村です。中学校では一年の担任をしながら放送部の顧問をしております。

限られた時間の中で、パワーポイントの資料も使いながら発表させていただきます。

まず、メディア・リテラシーについては、先ほど竹長先生がおっしゃってくださったように、絵や情報を読み解く情報受信力とともに、表現活動に生かす情報発信力であるということでは皆様にご理解いただけていると思います。先ほどのご発表にもありましたとおり、一つのことばの力、コミュニケーションの能力というふうに、まず国語科ではみられてまいります。さて、メディアという言葉は大変定義の広い言葉です。まず、外側の緑色の枠（プロジェクターの画像を見ながら）から考えていきたいのですが、なにかとメディア・リテラシーというと、テレビを使ったりパソコンを使ったりするとそれでもうメディア・リテラシーの授業かなと思ってしまいがちです。しかし、まず根本的には、メディアとは情報を運ぶ媒体という意味があります。本、ポスターなど印刷メディア、CD、レコードなどの音声メディア、それから文字情報やいろいろなものが全部混じったテレビ、ビデオという映像があります。そしてコンピュータ、最近は映像も手軽に扱えるようになりました。しかし、新しいメディアを使うことが新しい授業ということではありません。いままでの国語教育でもすでに教科書というメディア、黒板というメディア、そして教師自身がメディアを活用しています。すでに私たちが、メディア・リテラシーということは、長い間実践してきているのです。そして次に、メディア・リテラシーというのは、どのような範囲で扱うのかという教科の内容のものです。国語であれば、言葉を読み解くことを扱うこと

ができますし、社会科であれば、歴史の写真の読み解き方であったり、いろいろな国際情勢のことなど扱えます。それから保健体育であれば、健康教育、性教育といった意味でのコマーションルメディアの読解という授業もできます。また、技術家庭科であれば、ジェンダー等の扱い方もできます。また、美術や音楽ではその音やデザインなどの問題、アートという部分でも扱うことができます。また最近では高校の教科書でも英語では、メディア・リテラシーの説明文も掲載されるようになり、アメリカからの英語の情報を活用するという実践も広い範囲で広まってきています。また、それぞれのメディアの媒体で、どういうものが扱われているか、ニュースなのかドラマなのか広告なのか、そのどこを自分の授業で扱うのかということをよく見きわめておく必要があるわけです。それが一体どういう情報で扱われているのかを、メディア・リテラシーの授業をする教師自身がきちんと見抜くことが大事だと思います。そして、最も核心の部分はどの情報も文字情報、音声情報、映像情報で構成されていることです。さきほど、池田先生もおっしゃったように、どの教科にとつても国語科がベースであることには変わりありません。さて、メディア・リテラシーの指導項目を、私は四つに分類して考えてみました。一つめは「メディアと自分との関わりを知る。」メディアと自分がどう付き合っていくかを考えます。これは先ほど池田先生のグラフにもありましたように、どれが信頼できるメディアか考えるところから、自分の身のまわりのメディアに気づくことがまず第一歩と考えます。また二番目には、「メディアの構成・演出の技法を知る」ということ

です。例えば、どんなふうに演出がされているのか、一つ一つ読み解きます。三番目には、「メディアを批判的に読み解く」。批判という言葉は、クリティカル、クリティカルシンキングというところからきています。しかし、なにぶん日本語では、批判というと「あげあしをとる」というようなニュアンスにとられてしまいがちです。ですから、ここはもう少し丁寧に、「吟味・分析する力」と解釈してもよいかと思います。池田先生のご発表の想像力を育むという点がここに多くあたってくると思いますが。また四番目には、「メディアの意味の多様性を理解し表現活動する」ということがあげられます。まずは受けとめ方によって情報受信者の解釈は様々であるということを理解して、それを生かした上で表現活動に取り組ませます。私自身、こちらの下に書いてあるように、二〇〇一年の総務省委託研究では、四つの項目にそれぞれ一つずつの授業実践をあて、中学の一年二年三年で少しずつ育んでいくという12の実践事例を発表させていただきました。

さて、次に、国語教育の中で新しくメディア・リテラシーの育成で、三つの実践を紹介したいと思います。まず、自分とメディアとの関係というところでは、「メディア自分史で自己紹介」です。自分が小さいころから中学生になるまで自分がどんなメディアに接してきたかなというのをスピーチします。また、テキストやコンテンツを分析するものでは、ニュースの内容、記事の内容を深く分析する。またある映画の作品と小説とを見比べて、どんなふうに描かれているかを読解するという、読解の実践もあります。コードを使つての分析というものもある

ります。例えば広告の分析でも、どういうふうに広告を分析するのかというときに、キーワード、どんな言葉が、コードですね、多く使われているかを深く分析してプレゼンテーションする授業の実践です。また、先ほど鳥のくちばしの写真の教材文の教材がありました、こちらをですね、鳥の絵のシートを用いて、三つの特徴を例として書いたもので、くちばしの特徴を言語化したもので見つけたという、カルタ的な小学校低学年での実践があります。

こちらは明治図書から出ております『メディア・リテラシーへの挑戦』という本に掲載されているものです。また、例えばあるマンガを放送劇に作りかえる実践もあります。これは中学二年生の実践です。マンガを言語化して置き換える。そのときに、マンガのコマ、背景の音をどんなふうに表現するのか、また台詞をどんなふうに音声化するのかということで言語教育がおこなわれていきます。次に、こちらはシミュレーションです。実際に生徒がニュースキャスターになって表現します。これは、小学校五年生で、社会科で、情報産業についての学習があります。特にこの単元とタイアップさせた形で、小学校五年生の国語科ではニュース番組づくりというのがどの教科書でも掲載されています。中学校では、ちょうど二年生の国語の教科書で、ニュース番組づくりという単元が扱われています。

また、メディア・リテラシーというのは活動する中で育まれるということで、先ほど小学校低学年くらいから大切だということご提案がありました。その実践がこちらです。小学校一年生がデジタルカメラを使つて、夏をさがしてそれを文章化する授業

です。まずはこの活動が実は情報を切り取り、そして発信する  
まず第一歩だということです。

来年度から、中学校の国語科の教科書がかわります。特に中  
学校三年生に、メディア・リテラシーに関する説明文が多く掲  
載されています。まず、光村図書では「メディア社会を生きる」  
ということ、メディア・リテラシーそのものの定義から始ま  
り、実際にこんな活動をしてみるといいよという説明文が掲載  
されています。また三省堂では「世界のメディア・リテラシー」  
というところで掲載されています。メディアを学ぶという観点で  
す。東京書籍の方でも菅谷明子さんの説明文が載ります。

ただ私が危惧しておりますのは、こうしてメディア・リテ  
ラシーという用語が教科書教材に入ってきているにもかかわら  
ず、教師自身が従来のままの、「段落に番号を付けて要点を書  
きなさい」、「筆者がいたいことは何でしょう」というただの  
読解で終わらせてしまうことです。これでは、本当のメディア・  
リテラシーが生徒たちにつかないと思います。

「体験あつて学習なし。」といわれますように、ただ体験をし  
て、作業をして終わりではなくてその後にリフレクション（ふ  
り返る）一体ここで作業をしたことで自分が何を学んだのかと  
いうことを深く定着させる必要があります。そこで、私が四点  
挙げた部分で、「カメラもアップでとるのかルールズでとるのか  
によって伝わる部分が違うよね。」それから「一つの同じ写真  
を見てもいろんな表現があるよね。」というふうに教師自身が  
リフレクションをどのポイントで投げかけるかで、学習者自身  
はそこで意味の多様性、解釈の多様性があるんだということをし

納得できるのです。構成・演出をどうしたらいいのかなと自問  
自答することで、構成と演出の技法を自分の中に学びが深く定  
着していくと思います。つまり教師がこれまでのように、一問  
一答形式で知識を教えるのではなく生徒自身の日常のメディア  
体験や様々な既存の知識の中からある部分、生徒の力を引き出  
していく。それをまとめ、外言化していくことがこれから重要  
になっていきます。

学校図書でこの春に、ビデオ教材を共同で開発しました。例  
えば小学校低学年では「絵を見て話そう」、中学年では「みか  
んの広告をしよう」、それから高学年では「ニュースの探検隊」  
というところで、新聞、テレビのよさを再発見しようという教材  
を開発しました。こういったメディア・リテラシー、国語科の  
中だけでなく広く一般の日常生活に根強くひろがっていく学習  
が大切です。こうしてメディア・リテラシーを学んだ生徒が社  
会に出たときに、よりよく今のメディア状況を踏まえよりよく  
生きる資質の育成につながると 생각합니다。

もしよろしければ、実際にどんな授業なのかなということ  
ビデオを紹介させていただきます。こちらは、先ほど紹介した  
学校図書の授業ですが、小学校一年生の絵を読み解くという授  
業です。（※ビデオの映像を流す）

こちらは、「見る力」という指導項目を言語教育に取り込む  
という意味で私も作ったものですが、実はこれはどこから発  
想を得たものかといいますと、今、メディア・リテラシー教育  
が世界で一番おもしろい、西オーストラリア州のパスからの  
ものです。この西オーストラリア州の州のカリキュラムフレ



ムワークの中では英語教育つまり言語教育、日本の国語にあたりますが、この中に、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」に加えて「見ること」という観点が言語教育の中に取り込まれています。そこから発想を得て、私も低学年の教材から中・高、そしてつながっていくものというところで作成しました。池田先生のご発表にもあるとおり、やはり人間が言葉を感じるのと違って、物を見て「あれが犬だよ、わんわんだよ。」といいながら、言葉を獲得していくわけで、視覚情報とそして言語と抽象的な概念が結びつくことで、人間というのは言語を育んでいくものです。このあたりの指導がこれまでの国語教育では足りなかった面なので、メディア・リテラシーの観点を含めて取り入れていきたいと思っています。

## 〈岩永正史 第一発言〉

山梨大学の岩永です。今日は、メディアリテラシーと国語教育というシンポジウムが開かれているわけですが、このようなシンポジウムが開かれること自体、メディアリテラシーに対して肯定的な姿勢が感じられます。ただ、現実はその教育がどのくらい広まっていくかについては、やや疑問に感じる部分があります。まず、学校ではそんなに新しいことをやっている時間がない。教科書を終えるので精一杯だという反応があるでしょう。しかし、メディアリテラシーが今までの国語教育と相容れない内容かと言うと、そうではないと考えています。

ここ四、五年、国語教育の中でメディアリテラシーという言葉に出会う事が非常に多くなったのですが、最近少し熱が冷め

たような気がします。当たり前前の指導事項になったのか、途中で止まってしまったか、そんな感じがしています。そして、止まってしまった原因として、メディアリテラシーに対する「誤解」があるような気がします。そこで、メディアリテラシーとは何か、ということでは先ほどから話が出ていますが、例えば菅谷明子さんの定義では、次のようになります。

『メディアが形作る現実を批判的に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力である』

そして先ほど述べた「誤解」というのは、この定義の「批判」という部分を巡って起こっているのではないかと思います。批判のことを、「吟味・分析」というと良いのですが、「批判」と言ってしまうと、どうもアレルギー反応のようなものがあるようです。

私は三年程前、この「批判」という言葉を巡って、大変象徴的な経験をしました。山梨で行われた国語の研究会で、二本の発表がありました。どちらも、新聞記事を批判的に読み解く実践でした。その時一人の先生が、この様な実践は中学生になつてから行うべきだと主張したので、私は「なぜ中学生になつてからだと考えるのですか」と尋ねました。するとその先生は、「子どもが、小学生の頃から批判なんかするようになったら恐ろしい」とおっしゃいました。それを受けて、他の先生が、「私は子どもの頃から何でも鵜呑みにするようになっては、それこそ恐ろしい」とおっしゃったんですね。この議論は、「批判」という言葉を巡ってどのように動いて行くかを、象徴的に表している場面だと思います。

とかく日本では、批判という言葉は、人の揚げ足を取る・非難するというニュアンスがついて回ります。しかしメディアリテラシーで言う「批判」とは、決してそのような意味ではない、ということを押さえておく必要があると思います。そこで、批判するとはどういう事なのかを、具体的な事例を示して説明していくことにします。新聞の中に、チラシ広告という物がありますね。チラシ広告を見てみると、様々な物があります。それらを大学生に見せた時の反応をご紹介したいと思います。

これは『この石を手にしたその瞬間から、お金が増える、貯まる、儲かる』というチラシです。特殊な石で作ったペンダントやブレスレットなどを身に付けると、良いことが起こると書いてあります。さらに、結婚できた、健康になったなどの事例も掲載されています。要するにその事例を元にして、「この石を買いましょう」ということを主張している訳です。みなさんは、この石を買いますか？大学生にこれを見せると、「買わない」と言います。「どうして？」と聞くと、「出ている事例が信じられない」と答えます。実際の事実を検証できないのに、買うことはできないというわけです。そりやそうでしょう。本当にこの事実があったのかという事がまず問題になるし、この事実が石を買うことと本当に結びついているのかという事に疑問が起きますね。事実と主張が結びつかないわけですから。しかしチラシ広告には、もっと巧妙な物もあります。

こんどは『発芽雑穀を食べてガンガン痩せた』というダイエット食品のチラシです。ここにも、47キロ→42キロになったとか、64キロ→57キロになったなどの事例が出ています。このチラシ

では、なぜその様な事が起きるのかを説明しているので、先ほどの石のチラシよりも、論理構造がしっかりしています。つまり、ここにある事例が起こるのは、背後にこういうメカニズムがあるからだ、ということを述べているわけです。

最初の石のチラシでは、根拠となる事実があつて、主張がありました。しかし、事実と主張を結びつける理由がないんですね。次に見てもらったダイエットのチラシは、根拠となる事実とそれを裏付ける理由、メカニズムが説明されている。そしてそういう物を揃えた上で、この食品を買いましょうと言っている。やや巧妙な構造です。でも、これに対して学生は、やっぱり「買わない」と言います。「チラシには理由となるメカニズムが書いてあるが、それが本当に実証済みなのかは分からない」と言うわけです。これはつまり、理由の裏付けがなければ、信用できないということです。

さらに、こんな物もあります。ロト6などの簡易宝くじの当選番号を予想する機械のチラシです。『一台五役の究極予想機』と書いてあります。これにも、根拠となる事例、つまり、これを使って当たった事例が出ています。それから、過去のデータから当たり番号を予測する、という理由付けがされています。これについても学生に聞いてみると、やはりこれも「買わない」という反応が返って来ます。このチラシについては、面白い意見がありました。「もしこの機械がそんなに当たるのなら、売るわけがない。自分で使った方が儲かる」というのです。これは、反証という考え方で、根拠となる事実と理由付け、主張を全くひっくり返して別な考え方をすることで、こんな物信用で

きないと判断するわけです。

これらの例からも分かるように、毎日新聞に入ってくるチラシ広告を見てとつさに判断しているような事でも、私たちは結構高度な論理的判断をしているんじゃないかと思うわけです。

実は、今お見せしたような事は、国語科で以前からやっていた事なんです。光村の小学校四年の教科書に、「キョウリュウをさぐる」という教材がありました。最初の所を読みますと、何が書かれているかが良く分かります。

私たちは凶鑑や博物館で恐竜をみることができます。しかし、実際に生きている姿を見た人は、誰もいません。では、一体何を手がかりにして、恐竜が生きていた時の姿を知ることができるのでしょうか。

では次に、「第三の手がかり」の部分をご覧ください。

第三の手がかりは、今生きている動物です。例えば、ダチョウの体つきとストルテイオミムスの骨組みを比べると、とても良く似ています。すると、ストルテイオミムスもダチョウのように、何かに驚いた時には、時速60キロメートルほどで走ったのではないかと考えられます。

これを読んでみなさんはどう思われますか。実はここには、大人が納得しても子どもが納得しないという複雑な所があります。ここで言っている事、つまり主張は、「ストルテイオミムスが時速60キロで走る」ということで、根拠となる事実は、「ダチョウが時速60キロで走る」ということです。ダチョウが60キロで走ると、なぜストルテイオミムスが60キロで走るといえるのか、という問に対する答えが理由付けです。「骨格が似てい

るから」であるというのが理由付けです。これでもって、大人は大体「そうか、わかったぞ」と思うわけです。けれど、大人がそう思うのは、理由の裏付けを、自分でしているからです。

大人は、生物学の知識から形の似ている物は機能も似ている事を知っている。しかし小学校四年生の子どもはそんなこと知りませんから、なんだか狐につままれたような気になるんですね。

先ほどチラシ広告を見て判断をするという事例を挙げましたが、そういう事は、こんな風に今まで説明文や論説文を学習する中で、やっていた事なんです。こういう事は、国語科の授業に限りません。新聞の投書を読んだ時、テレビで政治家の発言を聞いた時、こういう時に私たちが頭の中で行っている思考なんです。様々な情報と対面した時に、「えっ、まてよ？本当なのか？そんなはずはないだろう」そんな風に考える力を付けていくことが、批判的思考力を付けていくということで、批判的思考力とは、論理的な思考によって支えられているんです。そう考えていくと、メディアリテラシー教育は何か新しいことをやるのではなくて、今まで国語科でやって来た事をもう少し周辺に広げて行く作業である、そんな風に考えていくと良いと思います。国語科におけるメディアリテラシー教育は、別に特別な子どもを育てることではなく、論理的に物事を考えられる子どもを育てることであると理解すれば、身近な所から取り組めるのではないかと思います。

## 〈司会〉

ありがとうございます。これで、第一回の発言を終わります。

して、第二回の発言に移ります。それではまず中村先生のほうから五分ぐらいでお願いいたします。

### 〈中村純子 第二発言〉

先ほどの発表で池田先生の方からの感想をずいぶん取り入れてお話をさせていただきました。池田先生は、小学校低学年くらいでの絵を見るといところからどう言葉を立ち上げるのかという問題意識をお持ちでした。たぶんその発展型として絵を読み解くことも、今岩永先生のおっしゃった吟味分析するということもあてはまるのかなと思います。ただやはり、国語ですが、映像的な部分も、少し国語の言語で考える力の中に取り入れていくといいと思います。さきほどのこちらのチラシも、もちろん美術科ではないかなんていわれてしまうかもしれないのですが、たとえばこのデザインですとかロゴの形、あと色の分析もするといいいでしょう。「どんなふうに見せているのかな。」と考えさせます。それから、この中のデザインの「お金が増えてたまる」の周辺をみると、一万円札が散らしてあったり、あといかにも本当に実際の事例があったということを裏付けけるかのように、〇〇さん宛に封筒が添えてあるというところに、見る工夫がしてあります。そういうところに、ビジュアル的なもの、デザインを言葉として吟味していく部分も国語科でも扱っていくべきだろうと思いました。

どんなところに着目していくのかということ、もう一つ本を紹介させていただきました。こちらは、『メディア・リテラシーを伸ばす国語の授業 小学校編』、児童言語研究会か

ら出された本です。こちらの中で井上尚美先生が、言葉の魔術の磨き方という章を書かれています。どういう言葉に着目していけばいいのか、言葉の魔術の分析ということで、例えば比喩の魔術、美しい言葉の魔術、名付けの魔術など、12の項目で見抜くべきポイントがあげられています。こういった部分を、言語そして映像にも当てはめながら読み解くことが、これから教材開発をする上で、教師が持つべきポイントだと思います。

### 〈岩永正史 第二発言〉

では、二点申し上げたいと思います。まず一点目は、池田先生のお話にもあったように、小学校入門期という時期の大切さです。

この時に、一つ重要なこととして、入門期の指導にあたる場合は誰しも、絵や写真を丁寧に扱うことをしています。しかし、一年生の時は確かに絵や写真など、様々なメディアを使うことでメディアリテラシーの学習が出来ているのだけれど、段々学年が上がるにつれて、この様な授業を忘れてしまいます。先生方も、小学校の教科書でメディアを扱うという状況に置かれて初めて、メディアの扱いを意識するようです。ですから、一年生の時に扱ったメディアを、どのように発展させていくのかという意識を持つことが、非常に重要であると思います。そういう点で、メディアリテラシーという言葉をもっと最近聞くようになってきたのは良いことだな、と思います。

二点目は、言語論理教育について、トウルミンの論証モデルを取りあげてお話ししようと思います。このトウルミンの論

上二点お話ししました。

## 〈池田邦彦 第二発言〉

お二人の先生のお話は、自分がうまく言えなかったことをとても詳しく言ってくくださったので、なるほどなと聞いていました。私は二つお話をします。

一つ目。先ほど岩永先生から「批判」ということについて話が出ましたが、小学校からその批判の力をつけていかななくてはいけないということをおもひ強く思います。先ほどの発言の続きなんですが、資料三の「みんなのはる」という教材にしても、資料四の「あのね、ししくごやでうさぎを見たよ」という教材にしても、自分の視点で読んでいくことを学ぶ学習ではなく、他人の視点を受け入れながら読んでいく教材として扱うことができるのではないかと。そこに小学校で育てる「批判」の第一歩があると考え、「学び合いの学習」と資料に載せました。

「みんなのはる」で言うと、「女の子」に注目した子が、自分の見方だけで読み進めていくと、「キリン」の気持ちにはわからない。「ネコ」のことだけに注目していくと、「ワニ」のことはわからない。というように、自分のことだけで見ていくと、多面的な見方ができない、内容がしっかり読み取れないということになります。授業の流し方としても、子どもが自分の思いをついたことをばらばら言うだけで、「子どもがよく発言した」「いい授業だった」として、「それでいいや」ではなく、それぞれの子どもが注目した動物をとりあげ、「キリンさん、何考えてるんだろうね？」とか「ネコちゃんは何やってるんだと思う？」

証モデルというのは、かなり有効な、論理的思考を育てる骨組みになると思っています。そこで、先ほど事例として挙げました「キョウリウウをさぐる」という説明文を見てください。第三の手がかりの部分をつうルミンの論証モデルに当てはめると、主張は、「ストルティオミムスは60キロで走る」。これを支えているのが、「ダチョウが60キロで走る」と。そこで、「ダチョウが60キロで走ると、なぜストルティオミムスが60キロで走ると言えるのか」ということの理由付けが、「両者の骨格が似ているから」ということになります。しかし、ここでつうルミンの論証モデルで考えると、理由の裏付けや反証が考慮されていない事が、見えてくるわけです。こういう点で、つうルミンの論証モデルが有効であると言えるわけです。これを仮に、他の構造に置き換えたらどうなるでしょうか。例えば国語科教育において、論理的な思考力を育てるという目的で古典的な論理構造、例えば三段論法に置き換えるとうなるかというのと、このようになります。「ストルティオミムスは、ダチョウと骨格が似た生物である。」「ダチョウは、時速60キロで走る。」、これは、「AはBである。」「BはCである。」という構造になっています。そして最終的には、「AもC」である、つまり「ストルティオミムスも時速60キロで走る。」となるわけです。こういう風に見ると、三段論法ではきれいにまとまってしまつて、疑問が入る余地がなくなつてしまいます。これとつうルミンのモデルを比べてみますと、つうルミンのモデルはこれを当てはめることで検討の余地がかなり増えた。ここに、つうルミンの論証モデルの有効性があるのではないかと思います。以

などと立ち止まって、いろいろな動物から見た春の様子を多面的に考えさせる必要があると思います。それがこの教材を生かす使い方だと思います。

また、資料四の内容も、何気なく読み流しちゃうような教材ですが、この中にはとても大切な話し合いの「型」が出ています。実際の話し合いの場面で、誰かが「あのね、しくぐやでうさぎを見たよ」と言ったりしたら、きつと次に来る言葉は「オレも見たよ」「わたしも見た見た」とか、「え、うさぎ小屋にはニワトリもいるんだよ」などとなるのが子どもの自然な流れです。しかし、教科書に載っている「先生」の授業では、うさぎについて話した子どもにうさぎについて質問させています。さらに、うさぎについてきちんと答えさせています。これは、うさぎについて多面的に「見る」ということで、小学校で批判的な思考を育てるステップのひとつだと考えられます。子どもの自然な思考の流れは拡散的です。しかし、あえて話題をうさぎに絞って深く吟味させるという仕掛けが、そのための指導法として大事だと思います。

加えて、小学校で行わせる話し合い活動のテーマには堅苦しいものが多すぎると思います。環境問題とか。そういうのもいいですが、先ほど挙げた「死んだ人が生き返ると思いますか？」などというテーマでも、十分子どもたちは多面的な見方や批判的な思考力を育てることができます。テーマ自体はよくないかも知れませんが、こういうテーマの方が子どもは活発に話し合い、テーマについて多面的に考えたり、友達の発言を批判的に聞いたりします。話す聞く力をつけることに絞ったら、

話題の選び方も考える必要があります。

もう一つ、絵日記のことです。みなさん絵日記をかけたことがあると思いますが、どうでしょうか、日記を先に書いてから絵をかきますか、それとも、絵を先にかいてから日記を書きますか。先ほど中村先生もおっしゃっていたのですが、「絵から入る作文」、絵日記とは、作文を書いてから絵をそえるのではなく、絵から入る作文のことだととらえていく必要があるのではないかと思います。

これまで、メディア・リテラシーを育てる国語の授業について、ほかの先生方と違い、私は教科書を使った学習のことにしか触れていません。それは、十分教科書だけでもメディア・リテラシーを育てることができると考えているからです。特に、小学校の国語の教科書は今年度から一年生から六年生までA4版の大きな教科書に変わって、絵や写真も増えています。国語の教科書で文字を扱っていくのは当然なので、文字が減ったことを一概に歓迎することはできません。が、私は写真や絵から読み取ったことを文章にしていく、そういう学習活動もできる教科書になってきたととらえています。

「絵が多くなっちゃったから教科書が簡単になっちゃった」と言う人もいるんですが、私は好意的に受け取って、「国語の教科書が多様な学習に使えるものになったんだなあ」と思い、喜んでいます。以上です。

## 〈司会〉

ありがとうございます。私の方から申し上げたいことがあ

るんですけども、ひとつは、情報制作する側、例えば新聞社とかテレビの放送局とかですね。これまでは自分たちだけで情報を作ってきたんですけども、これからは視聴者をパートナーとして組み込んで、自分たちの番組を作ると。自分たちの側だけで、自分たちの論理だけで番組を作るという一方的な関係だけではなく、視聴者を含み込んで、パートナーとして参加させていく方向で、番組作りや新聞の紙面作りをしていきたいという意向を持っているようです。

ですから、そういうテレビ局や新聞社が読者や視聴者を教育することは、メディア文化の向上や局の信頼につながる。だからメディア・リテラシーというものを大変支援している。番組制作の舞台裏を積極的に公開していく、そういうようなことをやっています。ですから、メディアが作ってきたそのものを見て批判するとかだけではなくて、情報がどういうふうにして作られてくるのかという、その制作過程も見せているというような、そういうところもあります。ですから、単なるテレビ批判とか新聞の記事批判とかに終わらせるのではなくて、テレビや新聞というマス・メディアの性質や、番組作りの現実などを理解した上で、まあ、「私たちをうならせるような建設的なアイデアをどんどん出してください」と、こういうふうに、メディアの側では言ってるんですね。

情報を発信する、マス・メディアの側ではこのように言っているんですね。ですから、メディア・リテラシーの教育というのは大変大事だということが言われている。こういうことが一つ。

それから、中村先生のお話が特に関わるんだと思うのですが、これまでの国語教育では「話すこと・聞くこと」これ一つとしますね、それから「読むこと」「書くこと」の二つ、合わせて三つあるんですけども、これまであったそれら三つの指導に加えて、「見る」ことの指導、「見ること」の教育というものを、国語教育でやる。まあ、従来も（ずいぶん昔の教育の一領域として「直観科」というのが）あったんだけども、より「意識的に」ということになります。第四の言語活動「見ること」を含み込んで、国語教育をやっていかねばならないという現状認識に立っているということですね。まあこういう形で、今日のシンポジウムが行われているわけです。

さあ、みなさん方からの意見を頂戴する時間となりました。何かご意見、ご質問等ありましたら、どうぞ手を挙げてください。その際に、所属とお名前を言って頂けると幸いです。それではお願いいたします。

#### 〈埼玉大学大学院一年 小川〉

今日はありがとうございます。埼玉大学大学院一年、県下で小学校の教師をやっています小川と申します。よろしくお願ひします。今日のお話、大変興味深く聞かせていただきました。

岩永先生に質問なんですけれども、さっき岩永先生がおっしゃった、メディア・リテラシー教育に関しての論理的なものとをとらえる力、ということがメディア・リテラシーの国語科教育に必要とされることではないかというご意見に、非常にそうではないかなというふうに思っているんですけども、岩

永先生の主張の中に、批判的にものを読み取る力、なんだこれまでやってきたことではないかというような、これまで国語の中でもやってきたことではないかということについて少し疑問で、今本当にだまされる人が多い、おれおれ詐欺をはじめ、後から後からいろいろなことにだまされる、先ほどのチラシもだましであって、それを見抜くような力を今まで、小学校、中学校、高校の教育の中で、じつはこうつけられていなかったのではないか。だからこそ今、論理的思考力の教育が必要だということがいわれているということが、現実にはいろいろなだましがあり、いろいろな新興宗教がやはりそういう現実がある中で、やはりやってこなかったことではないかと思うんですけども、岩永先生は今までやってきたことではないかというふうにいわれているということはあるようなことかということ質問します。よろしくお願いします。

#### 〈司会〉

他に関連したものでありますでしょうか。よろしいですか。それではただ今の質問についてお話お願いします。

#### 〈岩永 質疑応答〉

やってきたことではないかとわたくしは申し上げましたが、いやそうではないのではないかというご意見ですね。

さきほど「キュリュウをさぐる」という教材を取り上げて、これをトゥールミンのモデルで分析すると論の構造が十分ではないと、大人は分かるけれども子どもには分からないのではない

いか、というふうな事例を挙げましたけれども。これは、国語教育の雑誌の中からとっているもので、つまり私が考えたことではないんですね。ですから、トゥールミンのモデルというのは意識するしないに関わらず、先生方が教材研究するときには、「うん？ここはへんだぞ。」というふうになる。そういうようなところがあつたのではないか。そしてそれをもってそれを教材なり授業に反映させるということでもってやられていたのではないかというのが私の主張でございます。しかし、私が今いったようなことは、そのままでは教育観をかえるということとはなかなか無理なことだと思えます。例えば説明文では段落と段落の関係をとらえる国語的な捉え方が主流で、実際にそこに述べられていることの妥当性の検討が出来ていないという。でも、私が出会っている大学生たちは先ほど申し上げましたように結構意識しなくても高度な手続き判断をやっているわけです。ということとは、小中高校の教育の中で扱われてきたが、身につけた子と身につけない子というのが出来てしまっている。その辺が問題であると思っています。それは単に論理的思考を考えるだけではなくて、例えば、説明的な文章を小学校からずっと高校まで読む。そうすると、例えばここにいる埼玉大学の学生のみなさんは、単にそこに書かれていたことを知るだけでなく、うまい説明の方略というのはどういうふうなものなのかというようなことに対して認識が育っているわけです。こういうふうにですね、同じようにやっていますが、身についたものと身につかないものというのがある。そういうふうにと考えると、先ほどメディア・リテラシーという言葉を意識して教材を見ていくこ



とが重要だと言った意味がわかりただけだと思います。

## 〈司会〉

では関連して中村先生お願いします。

## 〈中村 質疑応答〉

今のご質問でふと思うのは、説明文の指導が、一つの学校文化の枠の中でこれまでやはり終わりにされていたのではないかということです。例えば恐竜の説明文を読んで、発展として、先ほど岩永先生がご紹介されたチラシの分析をするとか、日常でも応用できるという気づきへの促しというのが足りなかったと思います。社会に役立つものという意識、実生活に結び付くという部分が、これまでの従来の国語教育の中では、その橋渡しが足りなかったのではないでしょうか。また、今岩永先生の方でメディア・リテラシーの意識とおっしゃいましたが、メディア・リテラシーでこれまでの教材を見直すということで、一つメタ認知が生じて、生徒自身を育むし、教師自身も自分の授業を理解しメタ認知して捉え直す。これが一つの大きな契機になるところだなと思います。あと先ほど竹長先生が、マスコミの方々のほうからのこういったメディア・リテラシー教育の取り組みが出ているということですが、一つ情報でご紹介します。今NIEの方でも記者の授業への派遣をすぐにしてくださいます。私は総合の時間で、新聞記事を自ら読むということで「ゲーム脳の恐怖」に取り組みました。「ゲーム脳の恐怖」という本自体が大変とんでもない本なのです。あれはどうしてブームに

なってしまったのかということを中学1年生の生徒と一緒に考える授業をしました。その時に生徒とどこからその新聞記事が来たかを探したら、毎日新聞社のある女性記者が書いたことがわかりました。そこでちよつとNIEの方に問い合わせましたら、当の女性記者がわたくしの中学に来て下さり、その記者に取材をするという授業が成立しました。また、今テレビ局の方でも、学校の授業に出前授業が始まりました。テレビ朝日が先駆けです。普段テレビを作るといふ仕事をしているプロデューサーや、ディレクター、カメラマンが、学校の方に来て授業をして下さいます。またNHKが、毎年一回中学生フォーラムという番組をやっております。私が顧問をしている放送部では、中学生はテレビとどうつき合っているのかという番組を作りました。この番組は、来年一月二十九日午前五時から3チャンネルで放映されますのでよろしければご覧下さい。ちなみにこちらテレビ朝日の出前授業の方でもですね、今放送部の生徒たちがどんなふうに番組づくりをするのかというドキュメンタリー取材をしていただいています。テレビ朝日が自社の検証番組として「はいテレビ朝日です」という番組をやっています。小学校やいろんな学校でのメディア・リテラシー実践を放映がされています。このように業界の方でも学校に投げかけるチャンスがありますし、学校側の私たちもそういったチャンスをよりよく活用していけたらと思います。

## 〈司会〉

はい、どうもありがとうございました。それでは、池田先生、

中村先生からありました件についてお願いします。

### 〈池田 質疑応答〉

今日は低学年の話をしましたが、実は私は高学年の子どもと縁があります。これは五年生の子どもと試しにやってみたというもので、本当につたない実践です。

ここで考えていたことは、国語と総合というものをきちんと関連づけさせたい、ということです。総合的な学習の時間の中で、国語の力を基盤とする、そして総合で伸びる、という授業ができないかということです。つまり、「国語で助走して総合で跳ぶ」という発想で授業を組めないかということです。

まずこの中で一番子どもたちに勉強して欲しかったのは、同じ情報でもメディアによって伝え方に違いがあるということ。つまり、私は今こうして皆さんと音声言語で話していますが、いま話していることを文字で書いてらどうか、音と文字の違いに気づかせたいということです。また、音で伝える場合の情報加工のしかたと文字で伝える場合の情報加工のしかたは違い、発信側の意図というものも違うのではないかということとを子どもたちに感じさせたいということです。

学校で伝え合う活動をするときなんかには、必ず目的意識と相手意識というのをきちんと持たせたいと思うのです。それに合った加工をきちんと子どもたち同士でさせたい、つまり今回は、一年生、まだ姿の见えない新一年生ですので、その新一年生に伝えるための情報の加工のしかたというのを学ばせたかった実践です。

そのために、具体的にはここに書いてありませんが、かなり教師の自作教材を用意してやらせてみました。とくに新聞記事の原稿を書くときは、実際の新聞を何紙か持ってきてその記事比べさせたりしました。また、これはちよつと小学校ならではという感じなのかもしれませんが、内緒でそれっぽく池田が書いた新聞記事も使いました。例えば、新聞記事の文は語尾が「だ」「です」「である」で終わるんですが、そこをわざと敬体で書き直したやつを、新聞記事と同じようにワープロ打ちして配って、子どもたちに「どれが本当の新聞記事だろう」なんていうふうにゲーム感覚で当てさせたりしました。新聞記事の中うそはどれか、わざとふざけた文体で書き直した記事と本物の記事を並べて「本物はどれだ」というように、本物の記事と親しませるために、また、新聞記事の特徴に気づかせるために、あえて教師が「偽記事」を作って、子どもたちに本物を見抜かせたりというのもしやってみました。

### 〈司会〉

フロアからの発言もまだあるかと思いますが、ちよつと時間をとりたいと思います。何かありますか。

### 〈白岡町立白岡東小学校 向井〉

白岡町立白岡東小学校の向井と申します。先ほど竹長先生から「見る」ということのお話がありました。また、岩永先生からお話がありました。池田先生の資料の中にも、小学校低学年、入門期でのメディア・リテラシーの大切さといったこ

とが挙げられていました。こちらは、国語科でもそうなんですけれども、社会科、理科でもかつて非常に重要視されていた部分だと思っんですね。現状を考えてみますと、小学校低学年では、理科、社会科というのはありません。それに伴って、「観察」という学習がずいぶん小学校の中から減っているような気がします。

池田先生の資料の一番始めに二枚の写真が載っています。これは一枚ずつ別々の場面で使用されたものです。おそらく今回は紙面の都合で一枚ずつ載っているんだと思いますが、この写真1枚でここから何か気付かせるというのは、ある程度の子どもの力を前提としていると思うのです。と言いますのは、左側の写真は雪国のくらしのものです、「屋根が傾斜している」、これに気付く前提となる力というのは、子どもたちが自分たちが住んでいる土地の屋根の形を前提として知っているということになります。それとの違いが出たときに初めて屋根の傾斜に気付くということになります。

これ一枚だけ見せて、子どもたちにここから気付くことは、という「雪がある」「家がある」そういったことが出てくる。教科書の場合では二枚の写真の比較なんかでもつてくることだとは思っんです。例えばこれ一枚だけが出た時、子どもたちが屋根のことに気付くためには、自分のまわりの家の屋根について見ているという日常の生活経験が必要です。それは、特に低学年からの積み重ね、観察をしてきた中で育まれる力だと思っいます。そうすると、メディア・リテラシーは教科をまたがって、広い範囲にわたるものなので、理科と社会が低学年からな

くなったということとで全体のバランスが崩れていくということです。そうした中で、他教科と連携しながら、全体としてこの「見る」という力を、国語科は中心となると思っいます。言語を扱う教科ですから。ただそうした中で、他教科とも連携しながら総合的に力をつけていく取り組みがこれから必要になつてくるのではないかと感じました。感想でしかありませんが。以上です。

#### 〈埼玉大学大学院一年 山本〉

埼玉大学大学院一年の山本です。ぼくは恥ずかしながら不勉強でメディア・リテラシーについてあまりよくわかっていなかったのも、お話を聞いて勉強になりました。

素朴な質問ですが、ここにいらつしやっている方々はメディア・リテラシーは大事だということで積極的に実践されている方々だと思っんですが、先生になつた瞬間からメディア・リテラシーが大事だと思つていたわけではないと思っんですね。だとしたら、どういった時にメディア・リテラシーが今必要だと感じたのですか、ということと、メディア・リテラシーの育成を重視した教育を行つたときに、行っ前と行つた後の子どもたちの反応の違いや変容についてお聞かせ頂ければと思っのですが。

#### 〈桶川市立桶川南小学校 里田〉

桶川市立桶川南小学校の里田です。今日はどうもありがとうございます。ごさいました。私も現在小学校に勤務してゐまして、特に池田先生の発言に関しては興味深く聞かせて頂きました。私も学校で実践しておりまして、これは自分の学校の傾向ということで、

全体の傾向とは違うと思うんですけど、確かに何かを見て自分の言葉で言えずに、「えー」とか「わかんない」とかいう発言が授業中多くあります。それが、人間関係なんかでもそのことがよく出ていて、友達から言われた嫌なことが、気持ちではもやもやともっているんですけれども、相手には直接に言えないということが四年生になってもあります。学習の場面でもありますが、学習以外の場面でもあります。自分が受け取った情報を自分の中で処理して、それを発信するということに重点を置いた教育をしていく必要があると思いました。特に自分の中で処理できるような子なんかだと、余計にまわりに気をつかって何にも言わないような子がいて、反対に自分の中で処理できないような子なんかだと、相手にされたことをそのまま仕返すようなことがあるのが、私の学級、学校での現状です。

受け取った情報を自分の中で処理をして発信する、相手に伝える、ということと同時に、自分の思考を整理するという意味が重要になるので、そういうことにも同時に力を入れていかなければならないと思います。そういうことについて何かお考えがあったらお聞かせ願いたいと思います。

## 〈司会〉

フロアからのご質問がありました。最後のご質問は「発信する」ということに関するものでした。メディア・リテラシーについては「受信する」ことだけでなく「発信する」ということについても考えていかなければならないと思います。

それではお三方へのご質問・ご意見等がありましたので、そ

れらを踏まえて、最後の発言をお願いしたいと思います。お一人五分くらいでお願いしたいのですが、池田先生、中村先生、岩永先生という順番でお願いいたします。

## 〈池田邦彦 最終発言〉

自分で「メディア・リテラシー」ってつけなきゃいけない力だな」と感じたのは、冒頭でお話した通りです。子どもは、「わかんない」「べつにない」ようなことばかり授業でやっていたら意欲を失います。また、子どもが「わかった」「知っている」ということも、疑ってみることが大切ではないかと思ったわけです。教師はだれでも、子どもが「できた」「わかった」と言ってくれることを楽しみに仕事をしていると思います。できるだけ子どもたちが「自分でできる」、「勉強してよかった」と思わせたいいつも思っています。メディア・リテラシーを育てるということは、自分で学ぶために重要な視点を与えるということだと思っています。そのために考えたことを三つお話しします。

一つ目は、小学生の子どもでも意外に凝り固まった頭をもっている、その頭を柔らかくしたいということです。こういうときにはこうやらなきゃいけない、例えば文章が出てきたらすべて意味がわからなくてはいけないうとか、作文書きなさいと言われたらある程度「優等生的」なことを書かなきゃいけないだとか、写真を見て気付いたことを言うときなんかも、他の人と違うことを言わなきゃいけない、アカデミックなことを言わなきゃいけない、などと自分で自分にプレッシャーをかけてしま

う子が多いと思います。特に高学年の場合。だから勉強する意欲が失われてしまうんだと思います。

そんな子どもたちの視点を、ちよつと変えてあげることが大事だと思っています。そうすることでのびのびとした表現ができるようになったり、発言してよかった、文章書いてみてよかった、などという気持ちにさせることが必要ではないかと思っています。

具体的には、先生の意見に反論を書かせる「三分間作文」などを実践したことがあります。いつもの作文とはちよつと違った視点を与えてやることで、作文に興味を持っていなかった子どもたちも、意欲的に取り組ませることができました。先ほど雪国のくらしについてありましたが、この写真も堅苦しく扱わないで、一枚の写真を見せて「もしこの写真のところに行ったらどんなことして遊びたい？」などと問いかけて、そこから雪国のくらしに広げていくような使い方もできると思います。

もう一つですが、メディア・リテラシーの育成との関わりも含め、「学び合う」学習、子ども同士が言いたいことを言い合う、議論し合うという学習も積極的に取り入れていきたいなと考えています。その際、写真を使うことは有効です。と言うのは、文章以上に注目するところが人によってたくさんありますし、思考も揺れます。二年生の子どもには見えていなかったことが、同じ写真を見た六年生の子には見えるということもあるでしょうし、子ども同士で目の付け所は違います。だからこそ、友達同士で気付いたことを交流することで、自分が見えていなかったことを発見したりすることができま

観察についても同じで、ひとりで観察するよりも、何人かでしゃべりながらものを見ていった方がいろいろな視点から見られるのではないかと思います。だから、できるだけ小グループの活動、もちろん言いたいことが言い合えるような学級をつくってですが、子ども同士考えを交流しながら学び合えるような学習をすることが大事なのではないかと思っています。

最後の一つは、メディア・リテラシーは小学校で完結する力ではないので、小学校段階で重視したいのは「自分との関わり」という部分だと思っています。小学校ではいつでも「主体的に」ということを重視して育てたいなと思っています。「知らない」「わかんない」とかではなくて、「自分だったらどうするか」「自分だったらこういうふうと思う」などというように、自分の思いを大事にしていくこと。そして、友達同士で考えを比べ合えるぐらいまでは小学校で育てていきたいなと思っています。以上です。

#### 〈中村純子 最終発言〉

先ほどの、山本さんのご質問で、いつごろから必要だと感じたのかを思い返すと、一番の原点は、10年ぐらい前です。大変荒れた中学校にありました。私はまだメディアリテラシーという言葉にも出会っていませんでした。今は消えてしまった教材なのですが、光村の二年生で「北の国から」の脚本が掲載されていました。その中のワンシーンを絵コンテで書いてみようという課題を出しました。文字で表現された場面を映像で表現させました。実際に放映されたビデオをみてみようという授業で、

普段の授業で徘徊している生徒が、テレビがつくと席につくのです。「あれ、なんだろう？私の授業ではなかなか座らないのに、メディアの授業だとなぜ子どもたちは座るのだろう？」と考えました。ふと、このメディアの力を使うと何か学ぶことができるのかなあと考えたことが最初のきっかけだったと思います。

その後メディア・リテラシーの研究会と出会って、学ぶようになりました。ただやはり、普段は年間カリキュラムがありますから、メディアリテラシーの授業は年二回か三回ぐらいです。コマーシャルを使ったり、漫画のテキストを持つてくるだけで生徒たちのモチベーションが高まります。やはり、そこから、映像を見せて言葉を紡ぎ出すっていうことは、今までの従来の作文の授業とは雰囲気全然違います。そういうことで子どもたちも、これこれこういう感じで書けば良かったね、この文章もつとこうすると良くなるよねと確認でき、やっぱり学びの質が違ふなと感じます。また、私自身メディアリテラシーの授業のなかで何か使えないかなあと思っていると、普段電車に乗る時の中吊り広告をみるにしても、テレビをみるにしても、いろんなところから、教材がひらめき、楽しくなります。さらに、私自身、理論的なものを今、いろいろ勉強しているところがございます。また、子どもとの関係性という意味では、どの授業であっても、お互いがのびのび発言しやすい環境がすごく大切だと思います。一つの情報でも、いろんな解釈があることに気づく、一つの写真を見ても、子どもたちの、立ち上げてくる言葉が多様です。まずはこの千差万別を、お互い認め合う、受け入れ合うところから、人の個性を受け入れ合える環境つ

ていうのを育んでいけないかな、とも思います。本当に教育環境、お互い学び合う関係性が大切なものだなあと思います。そして、その環境をメディア・リテラシーの立場からも育んでいけるのではないかなと思います。

#### 〈岩永正史 最終発言〉

山本さんの、何故メディア・リテラシーにとりくんだのか、というご質問に答えたいと思います。というのは、私が取り組んでいる研究、それから今日発言した国語科とメディア・リテラシーというのがそんなに離れたものじゃないからです。私は今、山梨大学で小学校の国語教育を中心に担当しています。主に研究していることは、子どもたちが読書をする時に、頭のなかで一体何が起きているかということです。その時に働く能力は何で、どんな風に発達しているのか、ということです。ほとんど心理学みたいな研究です。私は何故そのような研究をするようになったのか、その辺にメディアが関わっています。

私は大学の教員をして16年目なんですけれども、その前、小学校の教員を13年間やっていました。教員になって間もない時だったと思うんですが、私のクラスでは、学校放送をよく見ていました。小学校六年生の、歴史の短いドラマで、伊能忠敬が全国をまわって、地図を作っているっていうドラマを見ていたときです。それをみながら子どもたちに、「番組の内容をメモして、どんな内容だったかまとめられるようにしましょう。」と言ったんですね。そしたらある一人の、ものすごく沢山のメモをした子がいました。ところが、そのメモを見てみると、そ

の番組が何の番組だったかわからないんですよ。言ってみれば画面の即時描写だったんですね。一人の男が家に入っただ、もう一人の男と話している。だけど「伊能忠敬」というのが一度も出てこないんですね。地図作りというのもし出てこない。何でこういうことが起こるんだろうと思いました。この子の頭のなかを割って見たいというか、これが私の研究のきっかけです。

このことは、例えば小学校六年生の教材で、国語で『やまなし』がわからないというのと同じです。あれは、子どもたちが大抵、読んだとき、びつくりします。「なんだこりゃ。」「何が書いてあるか全然わからない。」という子ばかり。でも、『大造じいさんとガン』とか『ごんぎつね』だと、「わかった。」って言うんですね。何故わかるんでしょう。それは別に国語の教科書だけじゃなくて、例えば、『水戸黄門』というドラマをみます。よくわかりますね。この次に何が起こるかということがわかりますね。それは何故でしょう。それは、すごく荒っぽく言ってしまうと、私たちが認識の枠組みをもっているからということになります。例えば文学教材であれば、物語スキーマということが、重要な役割を果たしているということを、70年代以降心理学の文章理解研究は言っています。私たちはこういう風に、表現を理解するある枠組みをもっているということなんです。それは、文字情報であれ映像情報であれ、大した変わりではなくて、その枠組みを育てることが、言葉の教育の大切なことであるというように考えるから、国語教育の一部にメディアが含まれてくるということなんです。今日お話した、トゥール

ミンのモデルにしても、私たちが論理的思考を行ううえでの、一つの枠組みなのではないでしょうか。だから、そういうものを小学校の小さいうちから少しずつ育てていくことが必要だというふうに考えるわけです。ここでは、子ども達がどんなふうにどんな能力を育てているのかということを視野に入れながら、メディア・リテラシーを考える必要性を提示して発言を終わります。

### 〈司会〉

どうもありがとうございます。強いてまとめることは致しませんが、二つぐらい、司会として申し上げます。

国語科教育では、明治以来、文字言語を中心としたリテラシーが指導されてきました。21世紀の国語科に新しく取り入れなくてはならないのは、「映像リテラシー」、つまり、「見る」という力ですね。そういうふうなことは、情報化が進んだ現代社会だけに、情報受信者としての判断力を鍛え、よりよい発信者となるリテラシーを育む教育が必要であろうというふうなことであります。ですから、「見る」ということ、「映像視聴」、見たり聞いたりすることを国語科の教育として扱うという意義があるのではないかと、こういうことであります。

二つ目は、岩永先生のお話にもありましたけれども、子どもの発達段階の中においてですね、例えば「映像の作られ方」「新聞記事の作成のされ方」という、情報製作の方法を教えるという、子どもがイメージ・シヨンの世界に遊ぶということを阻害してしまうのではないか、というふうなことですね。まあ、

批判的思考育成におけるいろいろな問題点があるのではないかと  
思うのですけれども、最後の岩永先生のお話の中に「子ども  
たちの心の中に物を見る枠組みを与える」ということが必要で  
ある、というご主張がありましたけれども、そういうことが、  
国語科とメディア・リテラシーという問題の中に含まれてくる  
のではないかと思います。従いまして、「子どもの心の中に物  
を見る枠組みを与える」という上で、メディア・リテラシー教  
育の持つ意味があるように思いました。

二時間という大変短い時間で、あつという間に過ぎてしま  
いましたけれども、大変充実した内容で終わることができました。  
シンポジストの三人の先生方、それからフロアの皆様方のご協  
力に感謝申し上げます。最後に三人のシンポジストの方に、盛  
大な拍手をお願い致します。ありがとうございました。それで  
はシンポジウムを閉じさせていただきます。

「附記」近年の「国語科とメディア・リテラシー」関係の文献  
に次のものがあります。

1、井上尚美編集代表『国語科メディア教育への挑戦』全4巻  
(明治図書)

第1巻Ⅱ小学校編1・・・低学年～中学年

(岩永正史編、2003年6月)

第2巻Ⅱ小学校編2・・・中学年～高学年

(中村敦雄編、2003年6月)

第3巻Ⅱ中学校編

(大内善一編、2003年6月)

第4巻Ⅱ中学・高校編

(芳野菊子編、2003年6月)

2、雑誌『月刊国語教育研究』(日本国語教育学会編)

No.383Ⅱ2004年3月号

特集〈批判力を育てるメディアリテラシー〉 岩永正史・  
加賀美久男・中村純子・町田守弘・松山雅子らの論文を掲載。

3、中村敦雄研究代表『国語科におけるメディア教育の開発――  
新たなリテラシーに関する基礎的考究――』

『平成14～16年度科学研究費・基盤研究(c)(1)研究成  
果報告書、2005年3月』

4、松山雅子編著『自己認識としてのメディア・リテラシー・・・  
文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの  
開発』(教育出版、2005年5月) ※学習ソフトCD付き  
「国語科とメディア・リテラシー」関係の文献は他にもあ  
りますが、以上の四点は内容的に優れているものです。ぜひ  
参考に見てください。